

「誰のものでもない都市」

——ブルトン『ナジャ』と精神分析的都市論——

宇 多 瞳

はじめに

シュルレアリスム (le surréalisme 超現実主義) は、アンドレ・ブルトン (André Breton 1896-1966) から第一次世界大戦を経験した詩人たちを中心とするグループによる文学・美術運動である。彼らが理性によって支配された近代文明を批判し、客観的偶然が呼び起こす痙攣的美やあるいは無意識のイメージによる「革命」を志向したことは良く知られており、これまでに彼らの作品や言説をめぐる数多くの研究が行われている。しかし、近代文明の所産であるさまざまな便利な技術や品々の恩恵を享受して日々生活している我々は、シュルレアリスムの近代批判を言葉の上では理解したとしても、実際その思想をどのように受け止めれば良いのかという点では困惑せざるを得ない。

そこで、本稿では近代批判に立脚した都市研究のひとつとして、現代フランスの哲学者、美学者であるベルナール・サリニョン Bernard Salignon の著書を紹介したい。シュルレアリスムはフロイトの精神分析理論から生まれたとしばしば言われる。そのため、シュルレアリスムの作品は個人の内面や夢、あるいは狂気と結び付けて論じられて来

た。しかし、本稿ではフロイトの精神分析論を都市や建築と結び付ける論考を取り上げ、その方法論を用いてブルトンの『ナジャ』*Nadja* (1928) をひとつの都市論として読解したい。サリニオンはモンペリエ第三大学の美学・精神分析学の講座を担当しており、「死の欲動」*la pulsion de mort*などの概念や自閉症児の行動分析といったフロイトの精神分析研究を美学の問題に接続させることで、芸術作品や創造行為の内面を言語化する研究を行って来た。その著書『芸術・瞬間・場所の在り処』⁽¹⁾において、サリニオンは古代から二十世紀までの広範な哲学思想を参照しながら、人の存在の在り方を明らかにするものとして都市を取り上げ、都市における建築の存在論を記述しようとして試みている。そうした都市のモデルとして取り上げられるのが、例えば古代フェニキアの植民市を起源と言われるリスボンのような地中海文化圏の古代都市である。サリニオンはそうした都市を芸術作品のひとつとして論じ、古代都市と現代都市の比較によって都市が患う近代の病を指摘し、そこから新たな建築論を構築しようと試みている。近代の病とは、物質によって埋め尽くされた現代都市のその画一化と全体主義による飽和 *saturation* 状態を指す。そのような状態を打開するために提示されるのが、「未決定」*indéterminé* あるいは「無限」*infini* という概念である。

『芸術・瞬間・場所の在り処』の中では、精神分析と美学の方法論によって地中海の古代都市が芸術作品のひとつとして論じられ、そこから現代都市と建築の新たな可能性が指摘されている。未決定 *indéterminé* あるいは無限 *infini* の概念は古代地中海都市においてどのように存在していたのだろうか。また、芸術作品のひとつとしての建築において、無限であり未決定であることが必要不可欠な条件だとするならば、我々は絵画や文学作品の中にもそれらの概念を見出せるのではないだろうか。これらの二つの問題を主として考察することが本稿の目的である。そのために、まず第一章ではサリニオンの『芸術・瞬間・場所の在り処』において都市がどのように論じられているのかを考察する。さらに、精神分析理論を用いたサリニオンの都市建築論は、詩人でありシュルレアリスムの提唱者であるアンド

レ・ブルトンの都市小説『ナジャ』を読解する新たな方法論になり得るのではないだろうかとの考えから、第二章ではブルトンの小説『ナジャ』とその舞台であるパリの街をサリニヨンの都市論に接続して分析し、結論として『ナジャ』の中に「都市における他者」を見出すという新たな小説解釈の可能性を指摘したい。その際に、サリニヨンの思想を『ナジャ』解釈のための支柱として選択するための補助となるのが、『ナジャ』と同時代のパリの街路を描写したヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin 1892-1940) の『パサーージュ論』(1935)である。ベンヤミンはブルトンの同時代人としてシュルレアリスム運動に関心を抱いており、論文『シュルレアリスム』(1929)の中でシュルレアリスムを政治的な見地から論じた。また、ベンヤミンは、ブルトンの盟友であるルイ・アラゴンの小説『パリの農夫』(1926)に着想を得て『パサーージュ論』を編纂している。『パサーージュ論』は二〇世紀初頭のパリにおいて前世紀の遺物として姿を消しつつあったアーケード街の観察を基にした近代都市批判の嚆矢であり、サリニヨンの精神分析的都市論は『パサーージュ論』を現代的に読み替えたものであるとも考えられるのである。サリニヨンの思索においてモデルとなっているのは地中海古代ギリシア都市であるが、その「無限」や「未決定」の概念はそれとは対照的な現代都市の画一性や全体主義的性格と対を成している。従って、サリニヨンの都市建築論はベンヤミンの『パサーージュ論』における二元対立概念に精神分析理論を導入することによって再構成されたもののように思われるのである。

本稿におけるサリニヨンの理論を用いた『ナジャ』読解は以上のような発想に基づく試論である。最後には、サリニヨンがその都市・建築論において現代都市にとって必要不可欠なものとして考えた「無限」性、「未決定」性は、一九世紀末から二十世紀初頭のパリにおける外部性と他者性についてのシュルレアリストたちの要求に他ならないという結論を導き出したい。

1. サリニョンの都市論における「無限」と「空虚」

1-1. 「誰のものでもない都市」

サリニョンの都市・建築論は、簡潔にその要旨を述べるならば「都市の精神分析」である。つまり、都市をひとりの人間のように産出され、成長し、絶えず変化して行く総体として考えることによって、都市を精神分析的考察の対象とするのである。古代ギリシア都市をモデルとするサリニョンの都市・建築論の特徴としてまず注目に値するものが、建造物だけでなく通りや広場、空き地や都市の外部を含む全体を建築として捉えていることであろう。

サリニョンは、都市のなかの空き地や都市の外部には「空虚」*vide*、あるいは「無」*rien*、「虚無」*néant*、「無限」*infini*があり、それが建築において重要な役割を果たすと考える。古代の哲学者アナクシマンドロスが「無限は万物の原理である」と言ったように、手を加える余地が残され、無限に向けて開かれた「未完成の都市」*la ville non finie*こそが建築のあるべきあり方であるとされる。

『芸術・瞬間・場所の在り処』の第一章「都市は誰のものでもない」*la cité n'appartient à personne*において、サリニョンは国家や社会によって占有され、制御された現代の都市を「全体主義」*totalitarisme*であるとして批判する。現代のフランスの諸都市は移民の流入とともに拡大し、中心部から周縁へと広がりつつある。そうした現在の市街地に典型的に見られる、周辺部、郊外、ショッピングセンター、新興住宅地などのように延長される都市機能は都市の死を告げているという。なぜなら、そうした市街地の拡張は現代人の自己愛 *narcissisme* のあらわれであり、死の欲動の支配を意味し、都市が飽和状態にあることを示しているからである。

それに対して、古代の地中海諸都市はそうした現代都市の現状とは全く異質であるとサリニョンは指摘する。本来、都市は共同であることの諸々の可能性に開かれており、古代ギリシア都市において都市は一種の公共財産であったという。そして都市の公共性は、実は都市の内包する「空虚」「無限」に他ならない。

「いくつかの古代ギリシア都市において、市民はそれぞれが絶対的な所有地を持っていた一方で、自分たちの収穫物を分け合い、共同で消費するように法で義務付けられていた。」と、アレントは述べる。」

«Dans certaines cités grecques, dit H. Arendt, la loi obligeait les citoyens à partager leurs récoltes et à les consommer en commun, alors que chacun d'eux en avait la propriété absolue⁽²⁾» (20)

この引用において述べられるように、都市空間で問題となるのは必然的に公共と私の問題、私と他者との関係性の問題である。空間が誰かの所有地になるとは、すなわち空間が他者の意志によって支配される状態を意味する⁽³⁾。

また、サリニョンの著作においては、街路や建物などの建築の諸形態が言語の構造と類似的に扱われている。それは、建築空間は言語と同様にリズムを持ち、複数の要素が連結されて繋がり、全体と細部によって成り立ち、空気を取り込んだり吐いたりするという構造を持つと考えられるからである。

古代都市においては、民主主義と建築は分かťことの出来ない結びつきを持っていた。また、民主主義において重要なのは物を分配することではなく、構築を永續させることであり、その姿勢を失わないようにすることでもあった。古代都市の形態は民主主義の思想をそのまま形にしたものであり、民主主義とはすなわち空間を物で埋め尽くすのではなく、「間隔とは何か」«Qu'est l'espacement?»という問題を常に考えることである。つまり、建築について考えるためには、逆説的に空虚 *vide* について考えなければならないということになる。

1-2. 内と外との行き来

ベンヤミンが『パサージュ論』において、二〇世紀初頭のパリのパサージュが果たした役割・機能について独自の視点から考察したように、サリニョンもまた以下の引用箇所において、広場や敷居の持つ特殊な役割を主張している。

「つまりこれらの広場、『敷居』、円形建造物、小公園は単に欠如や空白の価値を与えられるのではなく、それらはそこに**な**あるのであり、この**な**は人々、他者、都市生活、および『通り過ぎること』と静かに対話する言語としての建築の間で用途、実践、伝達能力を可能にする。」

C'est dire que ces places, ces «seuils» publiques, ces rotondes, ces squares ne se voient pas uniquement attribués une valeur manquante et vide, mais sont *là*, ce *là* rendant possible la capacité des usages, des pratiques, des communications entre les personnes, les autres, la vie de la cité, et l'architecture en tant que langage dialoguant en silence avec le «pas-ser». (24)

さらに、『パサージュ論』を思わせる次のような記述もある。都市を造るためにはその輪郭を定める *délimiter la cerne* 必要があるというのである。ただし、

「ヘラクレイトスによると、『人々は城壁に立ち向かうようにして法律 *nomos* に立ち向かわなければならない』、ポリス（都市国家）はまず第一にある場所に住む人々の集合、集団であり、城壁は二次的な側面であるに過ぎない。」

Selon Héraclite : «Il faut que le peuple combatte pour sa loi [*nomos*] comme pour ses remparts.» Pour les Grecs, (...) *la polis* est d'abord un groupement, un ensemble de personnes qui habite un lieu, l'enceinte ne jouant qu'un aspect

secondaire. (22)

と述べられるように、囲いや城壁があってもそれが人々の思想を制限したり防衛したりすることにはならない。建築は実際の現実的な事物であるにもかかわらず、見えるものと見えないもの、現れているものと隠されているもの、存在するものと存在しないものといった思考の本源に立ち戻らせる力があるのだと、サリニオンは繰り返し強調する。

都市において建造物の隙間の空間をつくるものとして、通りや広場が挙げられる。特に広場は人をもてなす場であり、そこに人々が集い、対話し、分かち合い、交換する場としての役割を果たす。

『パサージュ論』において、ベンヤミンは二十世紀初頭のパリを観察することによって市民社会の爛熟と崩壊を見通した。『パサージュ論』はこれまで、資本主義社会における商品価値や、人々の欲望や夢の有り様を考察する試みとして読まれて来た。だが、ベンヤミンが描き出そうとしたのはそうした物質文化にかかわるものではなく、都市の持つ「倦怠」や「永遠回帰」といった、都市に住む人々の意識を明らかにするものも含んでいた。サリニオンの『芸術・瞬間・場所の在り処』もまた、ベンヤミンと同様の見地に基づいている。ベンヤミンは『パサージュ論』において近代の商品生産社会を批判的に捉えたが、サリニオンはそうした社会的規制や配置から免れ得る都市や「場所」の可能性をギリシア古代都市のなかに見出そうとしたのである。

都市とはそこに人が住む場所でもある。住むとは、内と外、私的な場所と公の場所とを行き来することである。「公共空間において集合することの本質と、家の空間において居住することの本質をどのように結びつけるのか?」
Comment lier la nature de l'être ensemble dans les espaces publics et être chez-soi dans l'espace de la maison? (30) ただし、サリニオンは家と公共空間との行き来を単なる移行 *transitionalité* としてではなく、存在の様相 *modalité d'être* と

して考えようとしている。つまり、建築における家の中と外の公共空間という空間的關係は、個人における私的な私と公的な私という人間存在の關係に重ね合わされるのである。

1-3. 公・私、外・内、他者・自己の弁証法

サリニョンはしかし、古代都市における親密なものと共同のものを対立させたままにしておいたのであろうか。いや、そうではなく次の引用にあるように、対立するふたつに弁証法的な關係を見て取り、そこにフロイトの精神分析論を適用しようとしているように思われるのである。

「親密なものと共同のもの、私と公を対立させる代わりに、おそらく我々はただフロイト的な意味でのただひとつの欲動の様相としてそれらを考えることを試みねばならない。また、あらゆるものはこの弁証法（内部―外部、私―私ではないもの）をめぐるのみ成立すると見なさなければならぬ。」

Au lieu d'opposer intime et commun, privé et public, peut-être devons-nous seulement essayer de les penser comme une seule modalité pulsionnelle au sens freudien, et voir que tout être ne se constitue qu'autour de cette dialectique (intérieur – extérieur, moi – non-moi. (30)

このように、建築における内と外を、フロイト的な自己と他者の關係と重ね合わせて考えることによって、内部は外部からの避難所であり、外部は内部から排除されたものであるという關係が強調されている。さらに、次の引用では公と私の弁証法の公とはどのようなものであるのかが述べられている。

「もし公共空間が単に物理的に境界を定められて構想されているだけならば、それは隘路と隣接する通りと空とを幾何学的に遮っているに過ぎない。しかしその存在に立ち戻るとすれば、公共空間とは〈無限〉である。公共

空間は向こう側に広がり、未来の時間に曝される。公共空間は空虚であることに象徴的な敬意を表する。」

Si l'espace public est uniquement délimité et conçu physiquement, il ne peut l'être qu'en bouchant géométriquement les trouées, les rues avoisinantes et le ciel. Mais pour revenir à son être, il est infini, il s'étend loin au-delà et s'expose au temps futur-avenir... Il rend un hommage symbolique au vide. (33)

つまり、公共空間においてそこに何もないということはそれ自体が意味を持つ。革命などが起きた時、まず広場に民衆が結集し、それが巨大なエネルギーとなりついに政府を打倒するという光景がしばしば見られるように、公共空間の空虚性は時に大きな破壊力あるいは創造力を生み出す。

1-4. 都市における「無限」

ギリシアの都市テーバイにおいて、都市における内部と外部との弁証法は次のように語られている。すなわち、オイディプス王の近親相姦によって悲劇がもたらされたように、古代において都市が存続するためには常に異質性を受け入れ、都市と都市の外部との間で流動性を持たせ、外部の声に耳を傾けなければならないと考えられていたというのである⁽⁴⁾。このように、「誰のものでもない都市」の概念は、都市が潜在的に有する機能や都市における公共性の問題を浮き彫りにする。

では、ブルトンが『ナジャ』で描いたパリとはどのような都市であったのだろうか。詩人や画家は都市の持つ問題を敏感に察知し、都市の姿をただ表面的に描写するのではなく、その見過ごされがちな性質を巧みに捉えて表現する。ブルトンらシュルレアリストは近代都市パリにおいて「超現実」を見出そうとした。彼らの思考が都市の秩序や合理性を否定するとしても、それは都市の機能をむやみに否定しようとしたりするものでもなく、また薄暗い場所に

隠されているものや過去の遺物とされているようなものに対する単純な憧憬でもない。寧ろ彼らの文学作品は、次節で述べるようなサリニョンの精神分析理論を用いた都市論と類似したものとして、すなわち都市の働きと人間精神とを一体化させて捉えるような試みとして解釈し得るのではないだろうか。

1-5. 「間隔」「空虚」とリズム

西洋には構造物を身体になぞらえるという伝統的な見方があるが、サリニョンの著書の中でも身体と都市は互に対応するものとして考えられている。確かに、身体が様々な機能の総体から成るひとつのまとまり *unité* であるように、都市もまた様々な建造物が集まったものである。ただ、サリニョンによれば、二つの対応関係は単なる形態の類似や比喩的な意味に留まるものではなく、より動的に理解されなければならないのだという。身体や都市に動的な性質を与えるものとは、すなわちリズムである。都市におけるリズムとは、例えば狭い通りから急に広場に飛び出した時や、あるいは家の庭と隣の庭とを隔てる垣根をくぐり抜けた時に感じられるような、反復運動が何かの拍子に断ち切られるような感覚を指す。

「もし呼吸が意味に対応するようにして身体が建築に対応するならば、リズムはそれら二つに共通するものである。リズムがなければ場所も、住環境も、住む身体も、もちろん失われた身体の空間への碑銘も存在しない。」

Si le corps est à l'architecture ce que le souffle est au signe, le rythme est commun aux deux, il est ce sans quoi il n'y aurait ni lieu, ni habitat, ni corps qui habite, ni bien sûr inscription dans l'espace des corps disparus. (49)

また、サリニョンは都市を始めとする人間が作るあらゆる造形物は可能態 *dynamis* と現実態 *energèia* の間で存在していると考えている。これは、都市が常に潜在的に変化する可能性を持っており、現在の状態と将来においてそう

なる可能性のある状態とが常に並存しているということを意味する。建築は、未知部分を前方の未来に委ねて前進する。建築とはリズムと肉体、外装と内容、外見と触感である。従って、サリニョンにとって建築の理想とは未知、欠如ということになるのである。それは、開放に尊厳を与えることになるからである。無限は建築を通過する。建築における限界（有限）はそれ自身の彼方を含む。都市は彼方（無限）を抱く。

また、空間にはリズムが存在するとサリニョンは述べている。空間の中に存在するリズムによって、空虚の無限性の中に時間が喚び起こされるのである。

「リズムのない場所は間隔あるいは用地であるに留まっている。なぜなら、その場所は死んだようであり、それ自体に対して閉じられ、自閉しているからである。」

Le lieu sans rythme reste espacement, ou emplacement ; il est comme mort, refermé sur lui-même, autistique. (119)

「リズムは空間、無限は時間と呼び起こす。あらゆる建築は空間の襞の中と、無限の横断の中に暗示される。」

Le rythme révèle l'espace, l'infini le temps, toute architecture est impliquée dans les plis de l'espace, et dans les traversées de l'infini. (133)

「存在と虚無の関係は昼と夜、光と影の関係と同種のものである。存在と虚無の関係はよりアルカイック、よりプリミティブであり、そのために我々はそれに有限と無限の関係を接近させる。」

Le rapport entre l'Etre et le Néant est du même ordre (cosmos) que celui entre Jour-Nuit, lumière-ombre . . . Il est seulement plus archaïque, plus primitif, c'est pour cette raison que nous le rapprochons du rapport fini-infini. (147)

以上のようにサリニョンの精神分析的都市論を概観して来た。サリニョンの現代都市批判は文学的な表現を多く用

いているが、その考え方からは「現代の危機が公的領域の喪失に根ざしている」とするハンナ・アーレント (Hannah Arendt 1906-75) の思想が思い起こされる。精神分析を人間理解の手助けにするという点において、サリニョンの都市論とシュルレアリスムの思想は共通している。サリニョンの都市論は、西洋の伝統的な「無限」の概念を再認識することによって現代都市が現在の閉塞状態から脱し得るという指摘である。では、シュルレアリストらは急激に近代化する都市を目の当たりにした時、一体何を考えたのように行動したのであろうか。それについては第二章で論じることとする。

2. 『ナジャ』における都市の「無限」

『ナジャ』の中にサリニョンの都市分析論で述べたような「無限」や「空虚」が直接描かれているわけではない。ブルトンやアラゴンのようなシュルレアリストらにとって、パリの街は遊歩者としての作家や芸術家を受け入れる場であった。二十世紀前半のパリにおいてパリの都市の外観は変化のただ中にあり、作家たちはその目撃者でもあった。今日我々は都市の変容を痕跡として見る事が出来る。ブルトンの小説『ナジャ』*Najja* (1928) では、「私は誰か」というブルトンの問いに始まり、シュルレアリスムの必然性を持った偶然である「客観的偶然」を示す諸々の出来事が語られ、ブルトンとナジャという女性との出会いとその経緯が描かれる。偶然の出来事をありのままに描写する書き方ゆえに脈絡をつかみ難い構成の物語であるが、街路や建物の記述は当時のパリの街に一致しており、ブルトンが歩いた道をそのまま辿ることが可能である。『ナジャ』におけるブルトンとナジャの出会いの描写を思い起こそう。

「昨年④の十月四日、あのまったくにもすることのない、ひどくものうい午後のひとつがおわるころ、私はそんな時を過ごす秘訣をこころえているので、ラファイエット通りにやってきていた。『ユマニテ』紙の書店のショーウィンドーの前でしばらく立ちどまり、最近出たトロツキーの本を購入してから、あてもなくオペラ座の方向へ道をたどった。⑤」

«Le 4 octobre dernier, à la fin de ces après-midi tout à fait désœuvrés et très mornes, comme j'ai le secret d'en passer, je me trouvais rue Lafayette : après m'être arrêté quelques minutes devant la vitrine de la librairie de *L'Humanité*⑥ et avoir fait l'acquisition du dernier ouvrage de Trotsky, sans but je poursuivais ma route dans la direction de l'*Opéra*⑦».

ここでブルトン⑧はラファイエット広場の交差点を渡りながらオペラ座の方角へ向かっている。ラファイエット広場は現在はフランツ・リスト広場に改称されており、また作中のユマニテ書店は現存せず建物の骨組みが確認されるのみであるなど、パリの街は『ナジャ』が書かれた一九二〇年代と比べて細部において変容が確認されるが、主要な大通りや地区の様子は変化していない。

「私たちはここで、足の向くままにポワソニエール通りにいる。『あなたは誰』という問いに、彼女はためらいなく『私はさまざま魂』と答える。私たちは翌日もラファイエット通りとフォーブール・ポワソニエール通りが交わる角のバーで会う約束をする。⑧」

«Nous voici, au hasard de nos pas, rue de Faubourg-Poissonnière. “Qui êtes-vous?” Et elle, sans hésiter : “Je suis l'âme errante”. Nous convenons de nous revoir le lendemain au bar qui fait l'angle de la rue Lafayette et du faubourg Poissonnière^⑨».

ここでは二つの通りが交わる角に位置するバーが待ち合わせ場所として使われている。一方のラファイエット通り

は rue だが、他方のフォーブル・ポワソニエール通りには faubourg がつく。Rue はラテン語で「皺」を意味する ruga を語源とし、パリの中心部に張り巡らされた古く細い通りであるのに対して、faubourg はラテン語で「外部」を意味する foris と「町」を意味する burgus が組み合わされた語で、都市を囲む城壁の外にはみ出た地域やそこへ通じる市外道路を意味する。つまり、通りの角のバーは中央と周辺が交差する場所である。

「あなたは誰か？」という問いはおそらくブルトンの思考に一貫する主題である。あるいは、他者への問いは必然的に「誰」という問いになるとも言える。ブルトンの文学作品において我々は常に他者への関心を見て取る。そうした関心は一九一六年にブルトンがナントで従軍していた際に出会った若い詩人、ジャック・ヴァシエとの文通に始まる。ブルトンのヴァシエへの眼差しは風変わりである。なぜなら、ブルトンはヴァシエという人物そのものをひとつの詩であると言っているからである。同様に、ナジャもただのひとりの女性であって詩人ではないが、ブルトンはナジャの存在そのものに詩的なものを見ようとする。ナジャが答えた「私はさまよう魂」という言葉は、ベンヤミンの遊歩者 flaneur の概念を詩的に、あるいは極端化して言い換えたものと考えられるのではないだろうか。

また、ブルトンにとって都市の中を気の向くままに歩くという行為は精神の深部、無意識に足を踏み入れることと同義である。ブルトンは街を歩くことによって自らが何者であるかを問い、また出会った女性ナジャに「あなたは誰か」と問う。

「けれども私にとって、もう夜になるのも夜が明けるのも（といって昼だろうか）問題ではなくなるような精神の奥底へと本当に降りて行くことは、フォンテーヌ通りの、その後キャバレーに成り変った「双面劇場」へと戻って行くことである。⁽⁸⁾」

«Mais pour moi, descendre vraiment dans les bas-fonds de l'esprit, là où il n'est plus question que la nuit tombe et se

relève (c'est donc le jour), c'est revenir rue fontaine, au "Théâtre des Deux-Masques"」^(三)

なぜ都市をあてもなく歩く行為が無意識の搜索に繋がるのだろうか。また、なぜブルトンはそのような行為が詩を生み出すと考えるのだろうか。それはおそらく、第一章で述べたような都市を身体に対応させるといふ思考と関わりがあるように思われる。つまり都市を探索するという行動はそれ自体、人間精神の探索に繋がる行為なのである。画一化され一つの思想によって支配された空間では、人の行動もまた制限され、予め計画された通りに動くことを余儀なくされる。しかしブルトンが関心を示す行動は、そうした現代都市の人々の動きとは寧ろ逆の方向へ向かう。昼より夜を好み、広大なフォンテーヌブローの森を一晚中さまよい歩き、「パリで一番深く引きこもった場所」であるドーフィーヌ広場へ行く^(四)。労働の対価として与えられるような出来事は好まない^(五)。夜は都市が眠る時間であり、森は都市の外部であって、また人間の理性が届かない手付かずの野生の状態にある。広場は理性によって支配出来ない潜在的な力を持ち得る。

ブルトンが身体の構造と精神構造の相関関係を明確に立証しようとしていたかどうかは不明であるが、ブルトンが遊歩行為を睡眠と同一視していたことは確かであるように思われる。

「私は今、仲間内で当時を知る者が眠りの時期と呼んでいるあの頃のロベール・デスノスを再び目に浮かべている。彼は〈眠っている〉、だが、書き、話している。」^(六)

«Je revois maintenant Robert Desnos à l'époque que ceux d'entre nous qui l'ont connu appellent l'époque des *sommeils*.

II "dort", mais il écrit, il parle^(七)».

ナジャの「さまよう魂」は、おそらく夢を見ながら眠る主体と同等のものである。ブルトンにとって、詩はランボアの詩の題名である「言葉の錬金術」*alchimie du verbe* によって作られなければならない^(八)、また「言葉は愛を作る」*les*

mois font l'amour」とも述べている⁽¹⁷⁾。すなわち言葉はその真偽を確かめられないような、あるいは制御し得ないような熱情を生み出すための素材なのである。ブルトンにとって、言葉はある強い感情の結果としてもたらされるような産物ではない。むしろブルトンは、言葉自体に内在的に備わった魔力を感知しようとしている。

『ナジャ』で描かれるパリの劇場や映画館は、特殊な意味を持つように思われる。なぜならそうした場所は詩的言語の空間であり、特別な魔力を持っているように思われるからである。ブルトンは積極的に演劇の内容を把握しようとはせず、さらに所謂「B級映画」*Série B*を好む⁽¹⁸⁾。作品に対するブルトンの受動的な態度は、権威に対する幼稚な反抗として理解されるべきではないし、またシュルレアリスムの自動記述の理念である「無意識の思考の書き取り」と単純化することも出来ない。寧ろそれは、言葉が絶えず密かに生み出されては失われて行く「場」としての劇場に対する称賛なのではないだろうか。

『ナジャ』におけるパリは十九世紀末から二十世紀前半への変化の最中に位置している。細い小路や古びたパサージュは大通りに置き換えられようとしており、都市の急激な変容はブルトンに憂鬱な感情を与えたはずである。例えば『ナジャ』に登場する「近代劇場」*Le Théâtre Moderne*という名の劇場は、ダダイストらが足繁く通った二つのカフェ「小さなコオロギ」*Le Petit Grillon*と「ル・セルタ」*Le Certà*があったオペラ座パサージュの内部にあった⁽¹⁹⁾。この「近代劇場」は十九世紀末頃から野心的な演劇作品を上演していたが、一九二五年初頭にオスマン大通りの貫通に伴ってオペラ座パサージュとともに消滅している。

『ナジャ』における都市とはどのような性質のものなのであろうか。この物語におけるパリの都市は、第二帝政下のセーヌ県知事オスマン（*Georges-Eugène Haussmann 1809-91*）のパリ改造計画の遂行を目前にしていた。都市は広場から街へ、街から都市へ、都市から郊外へと身体のように成長する。建築や都市そのものにブルトンがどのような

関心を抱いていたかどうかは今後考察されなければならないが、ブルトンは『ナジャ』において都市の変容を夢想的に、また憂いを持って描写しており、都市の近代的な拡張計画に好意的であったとは考え難い。ブルトンにとって、都市における統一的価値観あるいは全体主義の進行は極めて現在性を持つ問題であった。一九二〇年代初めに、ブルトンがピュリストらと芸術の純粹化と單純化をめぐる議論で激しく争っていた事実を思い起こすと、都市の改造と芸術の様式的な單純化はブルトンにとって共通した問題であったのではないだろうか。

『ナジャ』は都市の内部に精神の内面を探し求める物語である。精神の内面は都市の表玄関のような場所ではなく、劇場や映画館、パサージュ、広場、通り、蚤の市などのような、都市の内面・裏側と言えるような場所に見つかる。それは、サリニオンが述べるように、都市・身体・言葉が互いに対応し合っているためである。精神の内面とは「内なる他者」であり、ブルトンは「空虚」や「無限」空間を求めて都市を彷徨う。そして、そうした空間はオスマンの都市改造が完成目前であった一九二〇年代のパリにおいて、自動車を走らせるために拡張された道路などによって失われようとしていたのである。

おわりに

サリニオンが行う、精神分析理論を用いた都市論は大変興味深い。精神分析理論において、人間の身体と精神は当然ながら完成された完全な存在ではない。建築が身体と同様に考えられるとするならば、建築もまた常に未完成で変化するものとして考えるべきである。建築を一個の完成作品として考えることは言ってみれば芸術作品ありきの考え方である。そもそも建築とは未完成であることがその本質ではないだろうか。芸術が常に作り変えられ人類の記憶を

内在させながら未来へと永続されるものであるとすれば、美学の考察対象は創造行為や完成作としての芸術作品だけではなく、完成に向かう途上にあると見なされ周辺化されていたものにまで広がり、芸術家の破壊行為や仮設的な作品をも視野に入れて考察の対象とすることが可能になるのではないだろうか。

本稿の目的はサリニヨンの都市論を単なる現代都市批判と見なすのではなく、彼の理論を建築以外の芸術に適用させること、シュルレアリスムの理論家であるブルトンの文学理解のための足がかりにすることであった。特にブルトンの代表作である『ナジャ』に描かれる都市がどのようなものであるのか、芸術家（詩人）と都市がどのような関わり方をしているのかを検証しようと試みた。

サリニヨンの著作と『ナジャ』を関連付けながらこれまで論じてきた。ブルトンにとってのシュルレアリスム文学は、『ナジャ』では遊歩と睡眠状態によって理解されると考える。それは芸術家の単なる遊び心に起因するものでもない。革命を目指す政治的行動という動機のみで帰せられるものでもない。それは、現代における自己の有り様を都市の探索によって見つけ出そうとする試みと言えないだろうか。シュルレアリストらの言行は、文章や写真資料として数多く残されている。それらは確かに諧謔的と言えるが、また今日の我々が持っている感覚から彼らの抱いている関心がそう離れてはいないという印象も与える。シュルレアリスム運動が現代的なものであると、はっきりと自覚させられるのである。ブルトンの様々な試みが一旦は失敗に終わったのだとしても、それらが行き過ぎた合理主義という近代的思考の危険性を見破っていたとすれば、それは注目されるべきではないだろうか。

註

- (1) Bernard Salignon, *Où l'art, l'instant, le lieu*, les éditions du cerf, Paris, 2008

本文中のサリニョンの引用は全てこの著書から行い、括弧内に頁数を記している。引用文の訳は筆者による。

- (2) Hannah Arendt, *Condition de l'homme moderne*, Paris, Pocket, 1998, p.77.
- (3) Saïgon, *Op. cit.*, «Lorsque la cité, au lieu d'être cette permanence ouverte à la puissance, aux possibles être-en-commun dans un lieu offert aux hommes, devient par elle-même cette volonté et qu'une volonté se trouve réalisée grâce à la cité, alors se perd l'essentiel du pourquoi de la cité.» (20)
- (4) Saïgon, *Ibid.*, «Le respect des dehors est lié à la capacité d'entendre et non de répondre, entendre les puissances qui appellent et qui viennent d'ailleurs pour ouvrir dans l'espace cette capacité d'écoute. Les voix des dehors ne sont dans la cité que cette possibilité en acte de sortir du narcissisme étouffant et surtout de prendre sur soi ce que nous devons à l'existence : l'Autre, l'attente, l'étrangeté.» (36)
- (5) アンドレ・ブルトン『ナジャ』、巖谷國士訳、岩波文庫、二〇〇三年、七一頁。
- (6) 図1を参照。
- (7) André Breton, *Nadja*, *Œuvres complètes tome I*, éd. M. Bonnet, 1988, p.682.
- (8) 『ナジャ』、前掲書、八三頁。
- (9) *Nadja*, *Ibid.*, pp.688-689.
- (10) 前掲書、四六、四七頁。
- (11) *Nadja*, *Ibid.*, pp.668-669.
- (12) 前掲書、九三、一三四頁。
- (13) 同上、六九頁。
- (14) 同上、三五頁。
- (15) *Nadja*, *Ibid.*, p.661.
- (16) Breton, *Les mois sans rides, dans les pas perdus*, GE I, p.131.
- (17) *Ibid.*, p.134.
- (18) Breton, *Nadja*, *Ibid.*, p.663.
- (19) Breton, GE I, pp.1533-1534. 全集の監修者マルグリット・ボネの注釈による。

